

訪れたいまち

鳥取県三朝町

みささちやう

六根清浄と 六感治癒の地

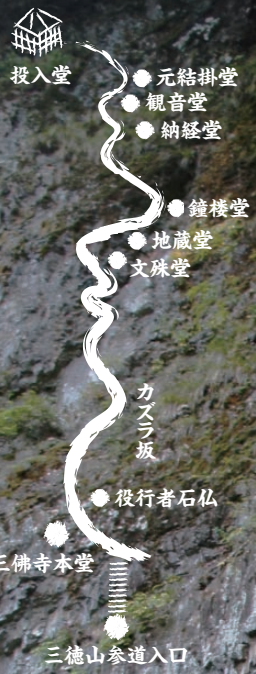
三徳山のはじまり

〜伝説が語り継がれる

神と仏が宿る山〜

三徳山は鳥取県東伯郡三朝町に位置する標高899・7メートルの霊山。その開山は、慶雲3（706）年にさかのぼる。寺伝によれば、役行者が三枚の蓮の花びらを散らし「神仏に縁のあるところに落ちるように」と祈ったところ、その一枚が三徳山に落ち、この地を修験道の行場として開いたのがはじまりとされる。その後、嘉祥2（849）年、慈覚大師が釈迦如来・阿弥陀如来・大日如来の三仏を安置し、浄土院三徳山三佛寺と称された。

標高520メートルの崖に張り付く三佛寺奥院投入堂（国宝）は、役行者が麓で造ったお堂を、手のひらに乗るほど小さくし、法力によって断崖絶壁の岩窟に投げ入れたと言ひ伝えられている。



日本一危ない国宝

「日本一危ない国宝」といわれる投入堂。数年前に初めて写真で見たときからずっと心ひかれていた。「どうやって建てたのだろう」。その思いは実際に登るにつれて強まった。

まずは三佛寺本堂の隣で参拝登山の受付。三佛寺執事次長の米田さんが案内してくださることになった。「六根清浄」と書かれた輪袈裟を渡され首からかける。六根とは目・耳・舌・鼻・身の五感と意（心）のこと。これらには不浄が芽生えたとされ、厳しい修行をすることで断ち清めるのが六根清浄である。



山門をくぐり橋を渡ると、いよいよ参拝登山のはじまりだ。役行者の石仏がお出迎え。開始早々から険しい行者道が続

き、すぐに息が上がる。前を行く米田さんの足取りは軽く、確実に滑り落ちないよう付いて行くのに必死で足元ばかり見ていたが、ふと視線を上げると木々の緑がまぶしい。

しばらく行くと木の根が複雑に絡み合ったカズラ坂にぶつかる。起伏に富んだ自然の山にほとんど手を加えてい

ない行者道は、それゆえ非常に過酷だ。木の根にばかり慎重に一歩一歩確かめながらよじ登る。

半分ぐらい登ったところで大きな岩の上に建つ文殊堂が見えてきた。垂直なんじゃないかと思えるその岩肌を、鎖だけを頼りに登り、舞台造りになっていく文殊堂の廻り縁に座ってみた。身を守る手すりや柵などはもちろんない。あまりの高さ

と開放感が肝が縮み、震える足をこらえながら這って進むと、そこには見たことのない絶景が広がっていた。まるで空に浮かんでいるような感覚になる。すがすがしい風を感じているうちに恐怖感は薄らぎ、心が静まった。

さらに上を目指し、地藏堂や鐘楼堂を越える。不安定な岩場に建つ鐘楼堂には、重々トンの鐘が掛かっている。この鐘はどうやって運び上げたのだろうか。「大晦日に除夜の鐘を突くのは大変です」と米田さんは笑うが、想像すると笑えなかった。



そして、納経堂を過ぎ観音堂の裏を通って元結掛堂を右へ曲がると…一気に視界が広がり、ついに目の前に投入堂が現れた。一瞬、時が止まり、音が消える。しばらく断崖に建つお堂から目が離せず、同時に頭の中では思考が止まらない。こうして登るだけで精一杯なのに、昔の人はどうやって資材を運び、どうやって近づく道すらない絶壁の岩窟にお堂を建てたのだろう。現実を目の前にしてもなお「言い伝え」とした方がしっくりくる。

進むべき道を選び、手と足の動きだ

けに集中していると、頭の中から邪念が消え、荒い呼吸を繰り返しているうちに、新鮮な空気が体中を巡り、清められたような気がした。自然に溶け込む投入堂の姿は美しく、奇跡にさえ感じる。「六根清浄」はじめて聞いた言葉がすっと入ってきた。こうして伝説は、魅了された多くの人々によって語り継がれてきたのだろう。



世界屈指のラジウム温泉

三徳山と共に日本遺産第一号として平成27年に認定された三朝温泉。「三たび朝を迎えると元気になる」といわれる世界屈指のラジウム温泉。浸かる・吸う・飲むの三つの方法で体に取り込むと、新陳代謝が活発になり、免疫力や自然治癒力が高まるといわれる。観・聴・味・香・触・心が喜ぶ「六感治癒」だ。



三朝温泉のはじまりは今から850年も昔、源義朝の家来である大久保左馬之祐が、三徳山参詣の途中に大きな楠の根元で白い狼を見つけ弓で射ようとしたが、「神仏にお参りした後には殺生はならん」と思い直し見逃してやった。するとその夜、夢に妙見菩薩が現れ、使いである白狼を助けてくれた御礼として「あの楠の根元から湯が湧き出ている」と告げた。あくる日、左馬之祐が楠の根元を掘ってみると、熱い湯がみるみるうちに湧き出てきたのが起源だといわれている。

それにしても三徳山参拝登山後の三朝温泉は格別だった。鉄板の組み合わせである。



▶温泉街の神様「お薬師さん」を祀る広場にある薬師の湯では足湯・飲泉ができる。他にも温泉街には気軽に楽しめる足湯があちこちにある。



三朝温泉かじか蛙保存研究会

温泉街のあちこちで蛙の置物を目にする。これは三朝町を流れる三徳川にすむかじか蛙。清流にしか生息しておらず、鹿のような軽やかな声で鳴くことからその名が付いた。



その美しい鳴き声を聞く「かじか蛙の声を聞く会（現三朝温泉かじか蛙保存研究会）」を昭和54年に発足して以来、かじか蛙を守るため、森に木を植え、清流を次世代に引き継ぐさまざまな活動に取り組んできた。「かじか蛙の声が聞こえる範囲が広がってきている」とうれしそうに笑う門木さん。

それら功績が認められ、平成27年4月に緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰（国土交通省関係）を受賞。しかし、森・川・海を未来につなぐ壮大な活動はまだまだスタートしたばかりだ。門木さんは「この活動をこれからも続けていき、自然の大切さを子どもたちに伝え、次の世代に引き継いでいきたい」と力強く語ってくれた。



▲会長の門木光明さん（左）と事務局長の塩谷俊樹さん（右）



▲三徳川にかかる三朝橋のたもとにある河原風呂は公共の露天風呂。三朝温泉のシンボルともいえ、解放感は何よりだ。



▲「ラヂムリエ」でもある木屋旅館の御船（みふね）さんが温泉の効能や入浴方法をアドバイスしてくれる。さらさらっと描く絵もとってもすてき！

▶三朝の町の木でもある栃の美で作った三朝名物の「とちもち」は独特な風味がとても美味。



▶レトロなインテリアが並ぶモダンな梶川理髪館。梶川さんが世界中から集めた数々のパーパーグッズにはすっかり夢中になる。



▶藤井酒造の藤井さんこだわりの古酒は国際ワインコンテストで2年連続金メダル受賞。無料で試飲もできる。

